

日蓮大聖人御書全集

ほうきょうほうじゅうじ

宝輕法重事

新版
1948
〜
1950

ほうきようほうじゅうじ

宝軽法重事

けんじ

ねん

建治2年（'76）

がつ

にち

5月11日

さい

55歳

にしやまどの

西山殿

たけのこひやつぽん

にじゅうぽん

お

た

お

筭百本、また二十本、追って給び了わんぬ。

みようほうれんげきよう

だいしち

い

ひとあ

しつぽう

妙法蓮華經の第七に云わく「もしまた人有って、七宝を

さんぜんだいせんせかい

み

ほとけ

だいぼさつ

しゃくしぶつ

もって三千大千世界に満てて、仏および大菩薩・辟支仏・

あらかん

くよう

ひと

う

くどく

阿羅漢に供養せんも、この人の得るところの功德は、この

ほけきよう

ないしいちしくげ

じゅじ

ふく

もつと

おお

法華經の乃至一四句偈を受持する、その福の最も多きには

うんぬん

もんぐ

だいじゅう

しつぽう

ししゅう

たてまつ

いちげ

しかじ」云々。文句の第十に『七宝を四聖に奉るは、一偈

たも

ほう

しょう

し

のうしょう

のうよう

を持つにしかず』と。法はこれ聖の師なり。能生・能養・

のうじゆう

のうよう

ほう

す

ゆえ

ひと

かる

ほう

おも

能成・能栄、法に過ぎたるはなし。故に、人は軽く法は重

うんぬん

き

じゆう

い

ふ

ばかなら

よつ

まも

きなり」云々。記の十に云わく「父母必ず四つの護りを

こ

まも

いま

ほつしん

ほう

よ

しよう

もつて子を護るがごとし。今、発心、法に由るを『生』と

しじゆうずいちく

よう

ごつか

まん

なし、始終随逐するを『養』となし、極果を満ぜしむるを

じよう

よ

ほうかい

おう

よう

よつ

『成』となし、能く法界に応ずるを『栄』となす。四つは

おな

ほう

ほん

うんぬん

同じからずといえども、法をもつて本となす」云々。

きよう

てんだい

みようらく

こころ

いつさいしゆじよう

くよう

経ならびに天台・妙楽の心は、一切衆生を供養せん

あらかん

くよう

ないしいつさい

ほとけ

つ

しつぽう

と、阿羅漢を供養せんと、乃至一切の仏を、尽くして七宝

たから

さんぜんだいせんせかい

盛

満

くよう

ほけきよう

の財を三千大千世界にもりみてて供養せんよりは、法華経

いちげ

じゅじ

ごじ

勝

を一偈、あるいは受持し、あるいは護持せんはすぐれたり

うんぬん

と云々。

きよう い

ほけきよう

ないしいちしくげ

じゅじ

経に云わく「この法華経の乃至一四句偈を受持する、そ

ふく もつと おお

てんだい

ひと かる ほう おも

の福の最も多きにはしかじ」。天台云わく「人は軽く法は重

みようらくい

よつ

おな

ほう

きなり」。妙楽云わく「四つは同じからずといえども、法を

ほん

うんぬん

くかい

いっさいしゅじよう

ほとけ

あいたい

もつて本となす」云々。九界の一切衆生も仏に相對して

量

いっさいしゅじよう

福

いちもう

輕

ほとけ

おん

これをはかるに、一切衆生のふくは一毛のかるく、仏の御

たいさん

重

いっさい

ほとけ

おん

ぼんてん

ふくは大山のおもきがごとし。一切の仏の御ふくは、梵天

さんしゅ ころも

ほけきよういちじ

おん

おも

三銖の衣のかるきがごとし。法華經一字の御ふくの重きこ

だいち

ひと かる

もう

ほとけ

とは、大地のおもきがごとし。「人は軽し」と申すは、仏を

ひと もう

ほう おも

もう

ほけきよう

人と申す。「法は重し」と申すは、法華経なり。

そ

ほつけいぜん しよきよう

しよろん

ほとけ

くどく

讃

夫れ、法華已前の諸経ならびに諸論は、仏の功德をほめ

そうろう

ほとけ

ほけきよう

きよう

くどく

て候。仏のごとし。この法華経は、経の功德をほめた

ほとけ

ふぼ

けこんぎよう

だいにちきようとう

ほけきよう

おと

り。仏の父母のごとし。華嚴経・大日経等の法華経に劣る

いちもう

たいざん

さんしゆ

だいち

ないし

ほけきよう

ことは、一毛と大山と、三銖と大地のごとし。乃至、法華経

さいげ

ぎようじや

けこん

しんこん

さいじよう

そう

比

の最下の行者と華嚴・真言の最上の僧とくらぶれば、

たいしやく

みこう

しし

うさぎ

しやうれつ

民

帝釈と獼猴と、師子と兎との勝劣なり。しかるを、たみ

おう

罰

いのち

しよきよう

ぎようじや

が王とののしれば、かならず命となる。諸経の行者が

ほけきよう　ぎようじゃ　すぐ　もう　かなら　くに　亡　じごく

法華經の行者に勝れたりと申せば、必ず国もほろび、地獄

い　そうろう

へ入り候なり。

敵

とき

偽

愚

そうろう

たと

ただし、かたきのなき時は、いつわりおろかにて候。譬

まさかど

さだとう

さだもり

よりよし

とき

くに

領

えば、将門・貞任も、貞盛・頼義がなかりし時は、国をしり、

さいしあんのん

うんぬん

かたき

とき

露

そら

上

あめ

妻子安穩なり云々。敵なき時は、つゆも空へのぼり、雨も

ち　ふ

ぎやくふう

とき

あめ

そら

ひ

で

とき

地に下る。逆風の時は雨も空へあがり、日の出の時はつゆ

ち

けごんとう

ろくしゅう

でんぎよう

とき

も地におちぬ。されば、華嚴等の六宗は、伝教なかりし時

しんごん

ごうてきしゆつげん

は、つゆのごとし。真言もまたかくのごとし。強敵出現し

ほけきよう

責

えいざん

ざす

とうじ

て、法華經をもつてつよくせむるならば、叡山の座主・東寺

おむろう

にちりん

つゆ

遭

思

の御室等も、日輪に露のあえるがごとしとおぼしめすべし。

ほけきよう

ほとけ

めつごにせんにひやくよねん

きよう

と

法華経は、仏の滅後二千二百余年に、いまだ経のごとく説

極

弘

ひと

てんだい

でんぎよう

知

ききわめてひろむる人なし。天台・伝教もしろしめさざる

とき

きた

き

書

極

にはあらず、時も来らず、機もなかりしかば、かききわめ

終

たま

にちれん

でし

ひとびと

易

ずしておわらせ給えり。日蓮が弟子とならん人々は、やすく

知

しりぬべし。

いちえんぶだい

うち

ほけきよう

じゆりようほん

しやかぶつ

ぎようぞう

書

一閻浮提の内、法華経の寿量品の釈迦仏の形像をかき

造

どうとう

そうつら

顕

たま

つくれる堂塔いまだ候わず。いかでかあらわれさせ給わざ

繁

止

そうつら

るべき。しげければ、とどめ候。

筭

ひやくにじゅっぽん

ほけきよう

にせんよねん

顕

そうら

たけのこは百二十本。法華経は二千余年にあらわれ候

ふせ

軽

こころざしおも

ゆえ

とうじ

いぬ。布施はかるけれども、志重き故なり。当時は

勸農

もう

おおみや造

もう

たみ

暇

かんのうと申し、大宮づくりと申し、かたがた民のいとまな

おんこころ

深

ほう

顕

そうろう

きようきよう

し。御心ざしふかければ、法もあらわれ候にや。恐々

きんげん

謹言。

ごがつじゅういちにち

五月十一日

にしやまどのごへんじ

西山殿御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押